

新明解 国語辞典

金田一京助

金田一春彦

見坊 豪 紀

柴田 武

山田 忠 雄

新明解 国語辞典

金田一京助

金田一春彦

見坊豪紀

柴田 武

山田忠雄

三省堂

新たなものを目指して

人も知るごとく、本書の前身は「小辞林」の語釈を口語文に書き替えることから出発した。今を去る三十二年前の事である。担当者見坊の熱心は、表音式見出しの実施、少なからぬ新項目の増補、近代的編集方針の創始と相俟ち、当時としては珍しく充実した小型辞書を世に送ったため、学生・読書子の迎える所となり今日に至った。その足跡は、戦時中では指定辞書としての位置を占め、戦後では凡百の類書を簇出せしめ、小型現代語辞書のいわゆる「親龜」に擬せられたことよって容易に理解出来よう。

このたびの脱皮は、執筆陣に新たに柴田を迎えりと共に、見坊に事故有り、山田が主幹を代行したことにすべて起因する。言わば、内閣の更迭に伴う諸政の一新であるが、真にこれを変革せしめたものは時運であると言わねばならぬ。群書の輩出によって国語辞書の質は漸を逐うて高まっている面は看取されるもの、なお大所高处に立ってこれを観る時、依然として低迷の境に在ることは否定出来ない事実である。生活に密着した若干の語の語釈に誤りが見られ、見出し語において即時代的ならざる欠陥を有することが指摘されたのは一再にとどまらない。もちろん、かかる指摘は他を待つまでもなく、編者自身が最も痛切に感じていた所。前身の改訂版発刊以来十余年の歳月は、編者をして或は新語採集と見出し語の選定に、或は語釈の根本方針の確立に沈潜せしめ、一日として休む日は無かった。ローマは一日にして成らざるとえのごとく、一日にして成るは辞書ではない。

思えば、辞書界の低迷は、編者の前近代的な体質と方法論の無自覚に在るのではないか。先行書教冊を机

上にひろげ、適宜に取捨選択して一書を成すは、いわゆるパッチワークの最たるもの、所詮、芋辞書の域を出ない。その語の指す所のものを実際の用例についてよく知り、よく考え、本義を弁えた上に、広義・狭義にわたって語釈を施す以外に王道は無い。辞書は、引き写しの結果ではなく、用例蒐集と思索の産物でなければならぬ。尊厳な人間が一個の人格として扱われるごとく、須らく、一冊の辞書には編者独特の持ち味が、なんらかの意味で滲み出なければならぬものと思う。かような主張のもとに本書は成った。今後の国語辞書すべて、本書の創めた形式・体裁と思索の結果を盲目的に踏襲することを、断じて拒否する。辞書発達のために、あらゆる模倣をお断りする。

しかしながら、一面から言えば、思索の結果は主観に墮しやうい。今回吾人の施した語釈は、それなりに沈潜の結果成ったものではあるが、シャープならんと欲する余り、限定が大に過ぎるといふ批評を甘受すべき面が或は皆無ではないかもしれない。公器である辞書の語釈として普遍妥当なものに成長するためには今後万人の実験を期待する。吾人は歓迎する—そのような意味における読者・利用者の声を。それは辞書を育てる上には必要欠くべからざる要素であると思う。

本書が今見るような形で世に送られるについては、編集期間の最後の四年間の或は全期を通じ或は短期間を限り、次の十君の惜しまぬ協力が有ったことを銘記する。

酒井憲二・若杉哲男・阪田雪子・倉持保男

鈴木真喜男・小笠原 一・山田 潔・長尾 勇・遠藤和夫・對馬友治

また、担当編集者三、四子の献身を多とし、併せて歴代辞書課長・出版部長の斡旋の勞に謝する。

昭和四十六年十月

編集方針

この辞典は現代の言語生活において用いられる日本語について、その多岐にわたる用法を種類の角度から反省・確認し、あわせて正確・効果的な使用が可能であることを念じて編集された。執筆に当たっては次の諸点を基本方針とした。

見出し語

一 採択方針 いわゆる自明合成語・擬音語は省略に従った。また、動詞とその名詞形との間に大きな用法の違いの無いものも、一別掲せず、他を参照させるにとどめた。また、形容詞、いわゆる形容動詞から派生する名詞・動詞は、別掲せず語釈の末尾に太字で示した。

二 表記 前著と異なり、「現代かなづかい」と「外来語表記の基準」に従った。また、重要語約五千七百には、**の印を付けた。

三 漢語の造語成分 「編集方針」の「編」「集」には単語として独立的用法があるが、「方」「針」には同じ意味ではそれが無い。本書では、後者を一般見出しと區別して、漢語の造語成分と名づけ、原則として奇数ページの左上すみに別枠(㉞)で囲んで示した。

四 固有名词 アフリカの国名は近來變動が多いことを考慮して、国名はそのすべてを巻末に付載した。

語 釈 従来の国語辞典の通弊であった、単なる文字の説明、堂堂めぐりを極力排し、文による解説を主とすることに努めた。

一 語義の配列 語義は、現代日本語において通常使用されているものを凝視し、頻度(能)の高いものから低いものへ、一般的なものから特殊なものへという方向によることを原則とした。古義・原義で、あとへ回すことに忍びないものは、語原として冒頭に注した。

二 語義の分類 いたずらに細分することは、かえって読者を迷わすも

のと考え、大分類に従った。右に伴い、その細分は用例の下のパラフレーズによって示すこととなった。

三 類義語の弁別

同義語間の用法の弁別に意を用いた。全く同義と思われるものでも、用法の違いの有ると考えられるものについては、漢語的表現・老人語などの名称のもとにその相違を記述した。

付

録 巻末に、文法関係諸表のほか、アクセント一覧・外国地名一覧・日本を中心とした簡易年表・計量単位・二十四気および国民の祝日を中心とする生活暦を付載して、利用者の便を図った。

細 則

見出しの表記と体裁

1 見出しはゴシック体とし、和語・漢語はひらがな、外来語はカタカナで示した。ただし、すでに慣用久しきに及ぶ約十語は準和語扱いとした。また、和語であっても慣用の有る向きはカタカナ書きに従った。

2 あいきど(合気道)・ねがわく(ね)における右傍のカタカナ小字は、現代かなづかいと異なる発音を示す。

3 見出しの区分は原則として二区分とした。助詞「の・つ」を介するものは助詞までを上位に扱った。また、促音・N音が新たに添加される口語形は、促音・N音からを低位として扱い、元來の变化形と區別した。 **そっけ(素気)** **そっけ(俗気)**

なお、区分は、現代の言語意識に即して行い、必ずしも語原にまではさかのぼらない。起原における区分は、語原として注した。

4 類書と異なり、二字の漢字で表わされる見出しでも、動植物名・固有名词および借字によるもの(仏教語の音訳や万葉がなによる国名の表記を含む)は区分を設けなかったものが多い。

5 活用語は原則として終止形で掲げ、語幹と語尾に分けられるものは、その間に、を入れた。

見出しの配列

6 見出しは五十音順に配列し、さらに同じかなの中では清音・濁音・半濁音、また促音・拗音・直音の順序に従った。

7 ーをもって表わす外来語の長音は、その場合の発音がア・イ・ウ・エ・オのいずれであるかによって、それぞれの音を表わすかなに置きかえた位置に配列した。

8 同音語のオーダー 語の性質・構成については

記号→造語成分→接辞(接頭語・接尾語)→単純語→複合語の順
語の種類については

外来語↓漢語(内部を上の漢字でそろえ、さらに画数順、同画数のもの)
和語

品詞の区分については

助詞↓助動詞↓感動詞↓接続詞↓副詞↓連体詞↓用言(動詞・形容詞)↓名詞(代名詞はその直前)

表記については

カナ↓漢字 の順

同音節数の語の区分については

ハイシャ 歯医者↓拝謝・配車・敗者

カ・エル(代える・変える)↓カエ・ル(戻る・返る・解る)

9 類音語およびならかの意味で対比される同音語を便宜(㊦)(㊧)で統合した。

10 子見出しとする範囲は、外来語(梵語の音訳を除く)はすべての場合にとわたり、漢語は複合語見出しに限り、また、和語は三音節以上に限る。

11 子見出しとしての複合語や慣用語・ことわざの類における共通部分は一で略示した(活用語の場合は、語幹までを)。

アクセントの指示

12 見出しの直下に○で囲んだアラビア数字はアクセント記号である。

詳しいことは別項「アクセント解説」を参照されたい。

13 アクセントは、助詞・助動詞・接辞・造語成分等以外の、単語としての用法を持つすべての語に示すことに努めた。子項目・派生語・用語例など、本書における「○で囲んだアラビア数字」はすべてこのアクセント記号である。

歴史的かなづかいの指示

14 アクセントに続けて、小字・カタカナで歴史的かなづかいを示した。

複合語の場合は区分に従って二行に割り、当該部分だけのカナを示して他は一で省記した。

例、あいだ[㊦]と[間] あいち[㊦]と[哀調]

15 用字によって漢字音の歴史的かなづかいが異なる場合は、語釈末尾に注記した。なお、14・15両項に関し、通行の国語辞典・漢和辞典などと異なる問題点については「あと書き」を参照された。

見出し語の正書法

16 「一」の中にその語の「正書法」を示した。ただし、見出しのかなと同じ場合は省略した。ここで言う「正書法」とは、現代一般に、漢字または漢字かな交じり表記の際の、最も標準的な書き表わし方を指す。表記が幾つもある場合は、語釈末尾に注記的に付記して、古

来の慣用・昔の用字・代用漢字などの別を示した。

17 いわゆるあて字・難字に属するものはすべて注釈に回すことを原則とした。ただし、複合語の造語成分として用いられる場合、右の扱いによらないものもある。

例、ああ：〔漢文では「嗚呼」と書く〕

つゆ：〔普通、梅雨と書く〕 からつゆ②〔空梅雨〕

18 教育漢字を教科書体活字によって示し、当用漢字表外の字には(一)を、当用漢字表にあつても音訓表に無い読みの場合には(一)を付けた。(一)も(一)も、直下の一字にだけ適用される。二字以上同じことを示す場合は(一)(一)で包んだ。

19 送りがない「送りがないつけ方」を参考にしたが、一般に省略することが許容されるものについては(一)に包んで示した。

20 ローマ字で書く形が普通であるものも、この欄に示した。

例、アイエLOOR〔ILO〕

品詞などの指示

21 「」の直下に(かな表記のもの)は見出し、またはアクセントの直下に、名詞以外の品詞名を(一)に包んで示した。

22 名詞・副詞のうち、サ変動詞またはいわゆる形容動詞としての用法をあわせ有するものは次のごとく扱った。

一、名詞のほかにサ変動詞の用法の有るもの

二、名詞のほかに連体形に「な」、連用形に「に」の用法の有るもの

三、右のうち、一般には連体形の用法だけのもの

四、名詞のほかに連体形に「たる」、連用形に「と」の用法の有るもの

五、右のうち、一般には連用形の用法だけのもの

六、名詞のほかに夕活用形容動詞とサ変動詞の用法の有るもの

七、名詞のほかにタルト活用形容動詞とサ変動詞の用法の有るもの

八、右の用法は雅馴(ユダ)と認められるもの(網羅(ワ)に限り、網羅(ワ)に認められないもの(網羅(ワ)に認められないもの)を除く。

九、右の用法は雅馴(ユダ)と認められるもの(網羅(ワ)に限り、網羅(ワ)に認められないもの(網羅(ワ)に認められないもの)を除く。

十、右の用法は雅馴(ユダ)と認められるもの(網羅(ワ)に限り、網羅(ワ)に認められないもの(網羅(ワ)に認められないもの)を除く。

十一、右の用法は雅馴(ユダ)と認められるもの(網羅(ワ)に限り、網羅(ワ)に認められないもの(網羅(ワ)に認められないもの)を除く。

十二、右の用法は雅馴(ユダ)と認められるもの(網羅(ワ)に限り、網羅(ワ)に認められないもの(網羅(ワ)に認められないもの)を除く。

十三、右の用法は雅馴(ユダ)と認められるもの(網羅(ワ)に限り、網羅(ワ)に認められないもの(網羅(ワ)に認められないもの)を除く。

十四、右の用法は雅馴(ユダ)と認められるもの(網羅(ワ)に限り、網羅(ワ)に認められないもの(網羅(ワ)に認められないもの)を除く。

23 動詞は活用の種類と自他の区別を示した。ただし、動詞の自他にについては疑義も多いので、サ変動詞のうち22に関するものは一切これをするさなかつた。動詞のうちの形式的用法は、補助動詞とはせず「接尾語的に」などの注記の形で具体的に示した。

例、あう〔自五〕… 〔接尾語的に〕…

24 (造語)は造語成分を意味する。(ム本文六三六ページ)

25 助詞の分類は単純化して、格助詞・副助詞・接続助詞・終助詞の四種とした。

例、あう〔自五〕… 〔接尾語的に〕…

26 次の四種のほかは、「野球で」「すもうで」「仏教で」「数学で」のごとく具体的に示した。

〔雅〕 雅語。日常のくだけた会話や文章には使用されず、短歌・俳句などの詩的表現や文語文に用いられるもの。

〔古〕 古語。漢文訓読系統の古風な文章語でしか用いられないものや、江戸時代までは日常語として行われた漢語。

〔俗〕 俗語。内輪の間柄・親しい関係にある相手の間に行われる卑俗な話し言葉。正式の場面や改まった場面では使用を遠慮すべきもの。

〔方〕 方言。語原などの指示

27 語原・字原の説明を要するものは、語釈の直前に「」に包んで示した。「」の中の読みがなは歴史のかなづかいに従った。

28 外来語のスペリングも語原扱いとし、英語以外は原国語名を略記して「」に包んで示した。原語の意味を注記したものも少なくない。

例、サイダー①〔cider=りんご酒〕…

29 語釈に先立って、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

て、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

いての限定を知らせることに努めた。また、必要な反対語の指示も怠らなかつた。

語釈の末尾には補足的説明を加えと共に、本文と異なる広義・狭義の用法および転義としての譬喩⁽²⁾的用法を注した。これらに對しては、従来多く語義分類の一目⁽³⁾が与えられていた。本書では、最新の意味論の方法に従い、かつ語の用法を立体的・全体的に把握⁽⁴⁾せしめる目的で、分類の項数を減らすと共に、これらを徹底的に注釈の形で呈示したのである。

30 類義語相互については次のごとき約束で用法上の差異を明示した。

漢語的表現 「弔する」「寵⁽⁵⁾する」「長生」は、それぞれ「とむらう」「かわいがる」「ながいき」が、それぞれ口頭語において普通に使用されるのに対し、同意ではあるが、何ほどかかたよりの有る語と考えられる。それを、改まった場合における漢語としては普通に用いられるものという見地から、上記の術語を用いた。一般には「…の意の漢語的表現」として、特に和語を直接音読した関係にあるものについては「…の漢語的表現」とする。なお、昔→往時→往昔、代代→列代→列世、病氣にかかると罹⁽⁶⁾→病→罹患は、この順に漢語意識の高いものと考へた。「勿怪⁽⁷⁾」を「意外」の漢語的表現と考へたのも同様の理由による。従つて、漢語的表現は、語の戸籍の別に必ずしもよるのではない。言語意識の差を当面の問題とする。

古語的表現

尸位素餐⁽⁸⁾ 死する 自然⁽⁹⁾ 緒顔⁽¹⁰⁾

寂然⁽¹¹⁾ 寂寞⁽¹²⁾ 寂寂⁽¹³⁾ 釈教 借問⁽¹⁴⁾ 思惟

(シ) 首級 衆徒⁽¹⁵⁾ 駿馬⁽¹⁶⁾ 上下⁽¹⁷⁾

作事場 定めて さやう さらば 肉⁽¹⁸⁾置き

さあらぬ さおとめ ささめごと しこめ

差し料 しおはま しろかね 付け火

老人語
雅語的表現
和語的表現

語釈の表記

31 当用漢字をフルに使つた。存在の意の「ある」「ない」「有る」「無い」としたのも、その現われにほかならない。また、外字でも見出しに使つたものは、その項では積極的に使用した。

32 外字および難読字には()内にカタカナ・二行で読みを示したが、昆⁽¹⁹⁾虫・哺⁽²⁰⁾乳類などはルビ無しでひんばんに用いた。

33 表記は必ずしも当用漢字表の音訓にはよらない。生⁽²¹⁾える・指⁽²²⁾す・入⁽²³⁾る・部屋⁽²⁴⁾・景色⁽²⁵⁾・魚⁽²⁶⁾・氣持⁽²⁷⁾・風⁽²⁸⁾・交⁽²⁹⁾・交⁽³⁰⁾じる・交⁽³¹⁾まぜる・交⁽³²⁾ざるなど、独自の表記を実施した。また、「おこなう」は「行う」「行なつて」と使い分けた。

34 文中における動植物名はカナがきにした。

35 子見出しはかながきを用いず、ただちに正字法をアクセントと共に掲出した。アクセントの上の小書きひらがなは読みを示し、直下のカタカナは歴史的かなづかいを示す。

36 用例の読みは、すべ、カタカナで示した。また、単独の見出しを別掲しないものについては、アクセントを付けることを旨とした。

造語成分

37 別枠の造語成分に掲げたものは、本文に載せてある単純語の例と用法が明らかに異なるもののみに限る。しかもざる場合は、本文中の用例の末尾に…を施した下にあげるにせよ。

38 本欄に掲げたのは造語力が少なくとも二、三例以上有るものに限つた。造語力の乏しいものは、個個の見出しの字原欄で説明を施した。

39 本欄には、略号としての一を一切用いなかつた。

約束手略号

40 わずらわしい約束手略号はなるべく用いない方針に従つた。やむを得ず使用した少数の例については前表紙見返しに一覽表を掲げた。

あいうちーあいしょ

あいうち①(相打)〔武芸の試合〕向こうが打つと同時にこちらも打つ。〔相撃 相討を書く〕

あいう①(相)〔博〕目玉 力を尽くして戦ふ。いよと同様 時がまらぬに〔相打つとも書く〕

アイエムエフ① I.M.F. (International Monetary Fund) 国際通貨基金。為替の安定を平価切下げ競争の防止などのために設けた国際機関

アイエルオー① I.L.O. (International Labor Organization) 国際労働機関。各国の労働条件の改善を目的とする。国際連合の専門機関

あいえんきさ①(愛嬌) たじろが好きな人。

あいえんきさ②(合縁奇縁)〔正〕は合縁機縁 環境・性格の違ふ者同士が、ふとした事から親くなり、あるは夫婦となり歴史となつて一生をわらうこととなす。

あいおい①(相生) ①同じ根から生え出ること。②松(①)〔相老〕に通じ、夫婦が一緒に長生きする。③アイオーン① I.O.C. (International Olympic Committee) 国際オリンピック委員会

あいいかさ①(哀歌) 悲しみの気持ちを述べた歌。

あいいかさ②(合鍵) その錠に合わせた作(た)も一つの鍵。

あいにかた①(相方) ①歌舞伎で芝居のせりふの間に入れる三味線師。②能の謡ひの囃子方(のせり)。③(るわで)遊興の相手の女。④(合)は合方とも書く。また(合)は多く、敵婚と書く。

あいがも①(間) 鴨(カモ)とヒルとの雑種。食用。〔合鴨とも書く〕

あいかわらず①(相愛めらず) ①副 今までの通りで変わるな様子。②(相)は相愛めらず。

あいかん①(哀感) 悲しみの感じ。ものがない感じ。

あいかん②(哀歓) 「悲しみと喜び」の意の漢語的表現。〔を共にする〕

あいがん①(哀願) ①泣きつく意の漢語的表現。あいがん②(愛玩) ①身近に置いて大切に取り扱い、愛みとめること。②(愛)として置く〔動物〕

あいきさ①(愛機) その人の使用しなれた飛行機。写真機など。②(愛器) その人の使用したれた楽器。あいきさ③(愛蔵) 愛のたむち。

あいきさ②(間着) ①上着と下着との間に着る衣服。②あいきさ(合着とも書く)

あいきさ③(合気道) 日本の武道の一種。柔術から分かれ、関節にかけるわざで、当て身を特技とするもの。合気術

あいきさ④(相客) ①同じテーブルで飲食する見知らぬ人。②宿屋の都合で同室に泊まり合わせる他人(未知の人)。

あいきさ⑤(愛郷) ①自分の生まれた土地を良い所だと思ふこと。②(一心)

あいきさ⑥(愛嬌) ①「愛敬」の変化 ②憎めないくつからし身ぶりやまゝい。③をふりまくったぶり。④人を愛しすぎるユーモアのあること。⑤失敗した時

今のは「だ」森の「者」客を喜ばせるためのちよつとした添えもの。⑥にガムを差しあげます。⑦他から好かれぶらぶらつきくるまうこと。⑧をりまく親善大使

あいきさ⑦(狂言) 能と能の間に狂言師が演ずる狂言。あいきさ⑧(愛吟) 好きな詩や歌をうたふこと。

あいくち①(合口) ①つばの無い短刀。②話のよくあつた人。③「が」が「俗」が「悪」すもうなど

あいくち②(愛犬) (Dogg) 飼っている犬。③大の性情をよく知りかわいがつて、「家」

あいくち③(愛護) 「顧」は目をかける意(客にひいきにされること)。

あいくち④(相子) ①とらも優劣の無いこと。勝負無しの「相」だ。

あいくち⑤(愛護) いじめなや、よきをまなわすに保護すること。⑥(動物) ⑦

あいくち⑥(愛好) ①「基」動物に優劣が無いこと。②「好」が「好」趣味(主観)として、その事に親しむこと。③「切手」者、平和を「する」

あいくち⑦(愛校) ①自分の学校の名を傷つけないように

気をつけ名譽を高めるように努力すること。②(一心) ③

あいくち⑧(愛子) 「号」は叫ぶ意(中国朝鮮で) 舞式の時、泣き叫ぶ習俗(声)

あいくち⑨(愛国) ①自分の生まれた国を誇りに思い、国の名を傷つけない(興す)自らに行動したる。②「者」③

あいくち⑩(愛改) ①「愛改」刷新をせよ。②「愛改」刷新をせよ。③「愛改」刷新をせよ。④「愛改」刷新をせよ。⑤「愛改」刷新をせよ。⑥「愛改」刷新をせよ。⑦「愛改」刷新をせよ。⑧「愛改」刷新をせよ。⑨「愛改」刷新をせよ。⑩「愛改」刷新をせよ。

あいきさ⑪(合言葉) ①「夜襲・乱戦の時などに」味方などいふことを知らせるために使ふ合図の言葉。②同志の結束を固め仲間主義、主張を自他に確立させるために使ふ。③「愛改」刷新をせよ。④「愛改」刷新をせよ。⑤「愛改」刷新をせよ。⑥「愛改」刷新をせよ。⑦「愛改」刷新をせよ。⑧「愛改」刷新をせよ。⑨「愛改」刷新をせよ。⑩「愛改」刷新をせよ。

あいきさ⑫(挨拶) ①「挨拶」は推す、挨拶は迫る意もと「揮問」における「挨拶」を指した。②人と会った時や別れる時にとりする、社交的言葉動作。「毎朝の! 初対面! 時候の!」そう言われて「返答に困った」これは「だわ」ほかになんと挨拶のしようがあるに言つた事欠いてなんといふされた物の言いだ。

あいきさ⑬(哀事) 悲しい出来事について述べた詩。

あいきさ⑭(愛児) ①(自分の子供) ②愛子。③アイシー(T.C.) (Integrated circuit) 集積回路。④アイビーエム(T.C.B.M.) (intercontinental ballistic missile) 大陸間弾道弾。⑤「射程が約一万千キロ、超長距離用戦略ミサイル」

あいきさ⑮(愛社) ①「自分が勤務する会社の成績を上げようと努める気持」

あいきさ⑯(愛車) ①マイカーを大事にする。②「振」

あいきさ⑰(愛着) ①「愛着」愛着。②「愛着」愛着。③「愛着」愛着。④「愛着」愛着。⑤「愛着」愛着。⑥「愛着」愛着。⑦「愛着」愛着。⑧「愛着」愛着。⑨「愛着」愛着。⑩「愛着」愛着。⑪「愛着」愛着。⑫「愛着」愛着。⑬「愛着」愛着。⑭「愛着」愛着。⑮「愛着」愛着。⑯「愛着」愛着。⑰「愛着」愛着。⑱「愛着」愛着。⑲「愛着」愛着。⑳「愛着」愛着。㉑「愛着」愛着。㉒「愛着」愛着。㉓「愛着」愛着。㉔「愛着」愛着。㉕「愛着」愛着。㉖「愛着」愛着。㉗「愛着」愛着。㉘「愛着」愛着。㉙「愛着」愛着。㉚「愛着」愛着。㉛「愛着」愛着。㉜「愛着」愛着。㉝「愛着」愛着。㉞「愛着」愛着。㉟「愛着」愛着。㊱「愛着」愛着。㊲「愛着」愛着。㊳「愛着」愛着。㊴「愛着」愛着。㊵「愛着」愛着。㊶「愛着」愛着。㊷「愛着」愛着。㊸「愛着」愛着。㊹「愛着」愛着。㊺「愛着」愛着。㊻「愛着」愛着。㊼「愛着」愛着。㊽「愛着」愛着。㊾「愛着」愛着。㊿「愛着」愛着。

あいきさ⑲(哀愁) ①「哀愁」哀愁。②「哀愁」哀愁。③「哀愁」哀愁。④「哀愁」哀愁。⑤「哀愁」哀愁。⑥「哀愁」哀愁。⑦「哀愁」哀愁。⑧「哀愁」哀愁。⑨「哀愁」哀愁。⑩「哀愁」哀愁。⑪「哀愁」哀愁。⑫「哀愁」哀愁。⑬「哀愁」哀愁。⑭「哀愁」哀愁。⑮「哀愁」哀愁。⑯「哀愁」哀愁。⑰「哀愁」哀愁。⑱「哀愁」哀愁。⑲「哀愁」哀愁。⑳「哀愁」哀愁。㉑「哀愁」哀愁。㉒「哀愁」哀愁。㉓「哀愁」哀愁。㉔「哀愁」哀愁。㉕「哀愁」哀愁。㉖「哀愁」哀愁。㉗「哀愁」哀愁。㉘「哀愁」哀愁。㉙「哀愁」哀愁。㉚「哀愁」哀愁。㉛「哀愁」哀愁。㉜「哀愁」哀愁。㉝「哀愁」哀愁。㉞「哀愁」哀愁。㉟「哀愁」哀愁。㊱「哀愁」哀愁。㊲「哀愁」哀愁。㊳「哀愁」哀愁。㊴「哀愁」哀愁。㊵「哀愁」哀愁。㊶「哀愁」哀愁。㊷「哀愁」哀愁。㊸「哀愁」哀愁。㊹「哀愁」哀愁。㊺「哀愁」哀愁。㊻「哀愁」哀愁。㊼「哀愁」哀愁。㊽「哀愁」哀愁。㊾「哀愁」哀愁。㊿「哀愁」哀愁。

あいきさ⑳(愛手) ①「愛手」愛手。②「愛手」愛手。③「愛手」愛手。④「愛手」愛手。⑤「愛手」愛手。⑥「愛手」愛手。⑦「愛手」愛手。⑧「愛手」愛手。⑨「愛手」愛手。⑩「愛手」愛手。⑪「愛手」愛手。⑫「愛手」愛手。⑬「愛手」愛手。⑭「愛手」愛手。⑮「愛手」愛手。⑯「愛手」愛手。⑰「愛手」愛手。⑱「愛手」愛手。⑲「愛手」愛手。⑳「愛手」愛手。㉑「愛手」愛手。㉒「愛手」愛手。㉓「愛手」愛手。㉔「愛手」愛手。㉕「愛手」愛手。㉖「愛手」愛手。㉗「愛手」愛手。㉘「愛手」愛手。㉙「愛手」愛手。㉚「愛手」愛手。㉛「愛手」愛手。㉜「愛手」愛手。㉝「愛手」愛手。㉞「愛手」愛手。㉟「愛手」愛手。㊱「愛手」愛手。㊲「愛手」愛手。㊳「愛手」愛手。㊴「愛手」愛手。㊵「愛手」愛手。㊶「愛手」愛手。㊷「愛手」愛手。㊸「愛手」愛手。㊹「愛手」愛手。㊺「愛手」愛手。㊻「愛手」愛手。㊼「愛手」愛手。㊽「愛手」愛手。㊾「愛手」愛手。㊿「愛手」愛手。

あいきさ㉑(愛書) ①「愛書」愛書。②「愛書」愛書。③「愛書」愛書。④「愛書」愛書。⑤「愛書」愛書。⑥「愛書」愛書。⑦「愛書」愛書。⑧「愛書」愛書。⑨「愛書」愛書。⑩「愛書」愛書。⑪「愛書」愛書。⑫「愛書」愛書。⑬「愛書」愛書。⑭「愛書」愛書。⑮「愛書」愛書。⑯「愛書」愛書。⑰「愛書」愛書。⑱「愛書」愛書。⑲「愛書」愛書。⑳「愛書」愛書。㉑「愛書」愛書。㉒「愛書」愛書。㉓「愛書」愛書。㉔「愛書」愛書。㉕「愛書」愛書。㉖「愛書」愛書。㉗「愛書」愛書。㉘「愛書」愛書。㉙「愛書」愛書。㉚「愛書」愛書。㉛「愛書」愛書。㉜「愛書」愛書。㉝「愛書」愛書。㉞「愛書」愛書。㉟「愛書」愛書。㊱「愛書」愛書。㊲「愛書」愛書。㊳「愛書」愛書。㊴「愛書」愛書。㊵「愛書」愛書。㊶「愛書」愛書。㊷「愛書」愛書。㊸「愛書」愛書。㊹「愛書」愛書。㊺「愛書」愛書。㊻「愛書」愛書。㊼「愛書」愛書。㊽「愛書」愛書。㊾「愛書」愛書。㊿「愛書」愛書。

あいきさ㉒(愛書) ①「愛書」愛書。②「愛書」愛書。③「愛書」愛書。④「愛書」愛書。⑤「愛書」愛書。⑥「愛書」愛書。⑦「愛書」愛書。⑧「愛書」愛書。⑨「愛書」愛書。⑩「愛書」愛書。⑪「愛書」愛書。⑫「愛書」愛書。⑬「愛書」愛書。⑭「愛書」愛書。⑮「愛書」愛書。⑯「愛書」愛書。⑰「愛書」愛書。⑱「愛書」愛書。⑲「愛書」愛書。⑳「愛書」愛書。㉑「愛書」愛書。㉒「愛書」愛書。㉓「愛書」愛書。㉔「愛書」愛書。㉕「愛書」愛書。㉖「愛書」愛書。㉗「愛書」愛書。㉘「愛書」愛書。㉙「愛書」愛書。㉚「愛書」愛書。㉛「愛書」愛書。㉜「愛書」愛書。㉝「愛書」愛書。㉞「愛書」愛書。㉟「愛書」愛書。㊱「愛書」愛書。㊲「愛書」愛書。㊳「愛書」愛書。㊴「愛書」愛書。㊵「愛書」愛書。㊶「愛書」愛書。㊷「愛書」愛書。㊸「愛書」愛書。㊹「愛書」愛書。㊺「愛書」愛書。㊻「愛書」愛書。㊼「愛書」愛書。㊽「愛書」愛書。㊾「愛書」愛書。㊿「愛書」愛書。

あいきさ㉓(愛書) ①「愛書」愛書。②「愛書」愛書。③「愛書」愛書。④「愛書」愛書。⑤「愛書」愛書。⑥「愛書」愛書。⑦「愛書」愛書。⑧「愛書」愛書。⑨「愛書」愛書。⑩「愛書」愛書。⑪「愛書」愛書。⑫「愛書」愛書。⑬「愛書」愛書。⑭「愛書」愛書。⑮「愛書」愛書。⑯「愛書」愛書。⑰「愛書」愛書。⑱「愛書」愛書。⑲「愛書」愛書。⑳「愛書」愛書。㉑「愛書」愛書。㉒「愛書」愛書。㉓「愛書」愛書。㉔「愛書」愛書。㉕「愛書」愛書。㉖「愛書」愛書。㉗「愛書」愛書。㉘「愛書」愛書。㉙「愛書」愛書。㉚「愛書」愛書。㉛「愛書」愛書。㉜「愛書」愛書。㉝「愛書」愛書。㉞「愛書」愛書。㉟「愛書」愛書。㊱「愛書」愛書。㊲「愛書」愛書。㊳「愛書」愛書。㊴「愛書」愛書。㊵「愛書」愛書。㊶「愛書」愛書。㊷「愛書」愛書。㊸「愛書」愛書。㊹「愛書」愛書。㊺「愛書」愛書。㊻「愛書」愛書。㊼「愛書」愛書。㊽「愛書」愛書。㊾「愛書」愛書。㊿「愛書」愛書。

【】中の教科書体は教育漢字、～は当用漢字外の漢字、ゝは当用漢字音訓表に無い。

家①②愛読書。

あいしよう①②哀傷「(詩や歌の形で)人の死を悲しむこと」。

あいしよう③歌③

あいしよう④愛称「親しい間柄同士で言ふ、姓・名前前の一種の略称。例 山本さん君・山さん山ちゃん山ヤサシ。」

あいしよう⑤愛称「正式の呼称(番号)以外に、個個の特急急行列車にける、優美な名称。例 こだまひかり。あき。⑥俗あだな。例 女の子に付けるチャコなど。

あいしよう⑦愛⑦「愛憎」好きで、いつも歌うこと。「歌③」

あいしよう⑧愛⑧「愛」好きで、いつも思い出しは声に出して言ひつゝする古典。

あいしよう⑨愛⑨「陰陽五行説をから見て」(男女の性格が相合ふこと)。「合性にも書く」。

あいしよう⑩愛⑩「愛情」(自分の身近に有る人や、自分より立場に有る人)に対して、何とか尽くしてあたたいと思ふ心。母(へ)の。」

あいしよう⑪愛⑪「異性に対して、特にあの人になければと思ひ、親しむ心。」を打ち明ける。

あいしよう⑫愛⑫「愛慕」かわいい(と思つて)いる娘。まむす。

あいじろ③「合印」(味方だ、うごことを知らるための目印)。「一枚の布を正しく縫い合はせるためにつける印。」

あいじん④「愛人」(愛する人。恋人)。「情婦・情夫」のふんよな表現。

あいな⑤「愛する」(他五)「愛するの少し古い表現」。「文語ではサ行変格」。「へき」。「かわいらしい」。「少女」。「見所が有り、出来るなら自分がめんどうを見てやりたい」気持だ。「青年」。

アイス①「造語」氷で冷やした。「コーヒート」。

ウイター④「アイスクリムの略」。「あずき」。

「明治時代」氷菓子と同音なので、高利貸の意にも用いた。「キャンデー」。

「和製英語」棒状に堅く凍らせた菓子。キンデー。「クリーム」。

「牛乳の脂肪分八パーセント以上のものと定められている」。

スケート⑤「ice skate」氷上ですすき。」「ボツ」。

「ice box」氷を使う手軽な冷蔵庫。」「ホツ」。

「ice hockey」アイスリンクでスケートをはいてする。

あ

ホツケル。「リンク」。

「広い場所」。

「スケートリンク」。

「合所」。

「スケートリンクの約束として決めた伝達・確認の方法」。「目手まね・信号・楽器ののりなどを使用」。

アイスバーン④「Eisbahn」雪の表面が固まって氷の上になった状態の山の斜面やスキ場。

あいな④「愛憎」(自分のまににしておけない)。「そんなでは」。「相しむけな」。「うごも」。

あいな⑤「愛する」(他セ)「愛情を持つ、かわいがる」。

「人のために、動物を」。「好きでいつもそれに親しむ」。「詩」。

「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑥「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑦「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑧「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑨「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑩「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑪「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑫「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑬「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑭「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑮「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑯「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑰「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

あいな⑱「愛憎」(愛憎)。「愛憎とも書く」。

きてて相手をするのがすかりやにな)。「都会生活」を

「店」の側で言つて来る用法)。「店」。

「相手をするのがすかりやにな)とありあな」。

「相手」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

「愛憎」。

●は重要語、①②③はアクセント記号、品詞の指示の無いものは名詞およびいゆる連語。



あいつ—あいらしい

人が大事に飼つた小鳥。

あいつ①(彼奴)二代(俗)あやつ②の変化あやつ、あいつぐ③(自五)①相次ぎ引き続いて起る。「悲憤・激憤相次いで」統統敗れる。「相継ぎ」引き継ぐ・強まらた表現。

あいつち④(相継)「刀を鍛える時などに、打ち合わせる體の意」「打つ」人の話に調子を合わせる。「あいつち⑤遊び④(仲間)①自分と相対し争う人」「悪いけんか」①自分と組になる。「結婚の」ダンスの「一争」①一方⑤(他五)事件に関係する相手の人。「取とる④(他五)相手と争うに争う」。

①狭義では「訴訟の相手」と訴えることを指す。「アデア③」(Adapt)理想・理念・觀念「何かをするにいての考え。着想。いい」思いつきだ。「アム④」あいでし⑤(相)弟子「同じ先生・師匠について、一緒に学ぶ弟子。同門」。

あいつち⑥(哀悼)「人の死を悲しむこと。おくやみ」①(愛統)「その書物・新聞などを、好きでいつも読むこと」①者①書①「相伴②(自五)①だれかを一緒に連ねる」①一緒にたつて現れる。

アイドリング①(Idle)「機械などの空回り」。

アイドル①(Idol)偶像「限り無き・崇拜能愛する」の対象となるもの。

あいなかば①する①(相半)「自サ」①い事と悪い事・分量合が(半)分つた。「功罪」あいなめ①「からだが細長く、緑を帯びた茶色の近海魚。長さ三〇センチで、食用。あなめ、アノメ科」。

あいなる①は①(相成)「出来ること。もしあければ」。

あいにく①(副)「あてなく②の変化」物事の進行・成就などを妨げる事態(起)たことを表わす。「一な(都合)の悪い」事に當るすた「一」病氣で行かれない、それほか、おさま(普通)生憎・合憎と書く」。

アイヌ①(Ainu)北海道カラフト・千島に住む、毛深い民族。今は日本人に同化した。昔は奥羽地方にも住んでいて、「アイヌ」を呼ばれた。「コタン④」(アイヌ村)。

あいのこ①(間の子)「雑種。混血児」②種類の違う二つの物の性質を部分的に兼ね備えているもの。「一弁当⑤」(合の手)と書く」。

あいのて③(合の手)「(邦楽で)唄のと唄との間に入る。三味線(唄)の短い演奏」④間に、入る入る音・掛け声。「間の手」と書く」。

あいのり①(相乗り)「(ひつちで乗るのが普通の乗り物に)一緒に乗ること」①自転車・タクシー⑤(俗)共同でチャリを利用すること。「番組⑤」(二社以上のスポーツが共同で提供する番組)」。

あいは①(愛馬)「自分がいつも乗る馬」②馬をかわいがり「一精神」。

あいはん①(合判)「あいいん」②連帯で責任を持つしるしに押す印」。

あいはん②(相判)「普通のノートの大きさの、紙の寸法。縦約二一センチ、横約一五センチ」(写真乾板では縦三センチ弱、横一〇センチ強のものを指す)③問判・合判とも書く」。

アイビー①(Ivy)「麗葉植物の一種。ツタの変種で常緑」。

アイビー②(略)「スタイル⑥」(Ivy style)「アイビリー」加入の大学生の伝統的なスタイル。「アメリカの代表的な大学生のスタイル。長の背広(三)ボタン、全体はほろりしている」。

アイビーエム①(I.B.M.)「International Business Machines Corporation(会社名) 分類・記録・計算・統計などいろいろの事務処理を行うコンピュータの商標」。

あいびき①(合)挽き「牛肉と豚肉を、交せてひくこと」。

あいびき②(逢)引合「恋し合う男女が目を忍んで会いながらララチ」(横曳)とも書く」。

あいふ①(合)符「駅で、手荷物を引き受けたために渡す札」。

あいぶ①(愛撫)「常に自分のそばに置いてかわいがり」②愛情の表現として「なでたさす」たすること」。

あいふく①(合)間服「春秋のころに着る洋服。あひき(合服)とも書く」。

あいふだ①(合)札「品物を預かっしるしに渡す札(半券)。(も)は、割符(券)を使った」。

あいべつ①(差別)「悲しい別れ」。

あいべつりく①(愛別)離苦「(俗)教で八苦の一つ。愛する人と別れられたる苦しみ」(仏に:哀別離苦とも書く)。

あいべつ②(相)部屋「(宿屋など)他人同士が同じ部屋に寝泊まりすること」。

あいば①(愛慕)「深く愛し慕うこと」②「一の情」。

あいば②(相)相棒「(麗籠を)一緒にかて相手の意から」一緒に仕事する仲間」。

あいば③(相)星「(う)もろから起つた語で」対戦する両者のそれぞれの勝ち星・負け星の数が同じである状態。「五勝三敗」の」。

アイボリー①(Ivory)「象牙」象牙色の厚い西洋紙」。

あいま①(合)間「何が行われる、あいた」の短い時間。「仕事」の「梅雨」の」。

あいま②(曖)「曖も味も暗い意」(は)っきりしない様子。あやや「模範⑤」(不明確・明瞭の)風儀上、いかわいい様子」。

あいま③(相)候②(自五)「候」は「期待する意」(両面)相候で「二」の要素が重なって「アラス」(成り)」。

あいま④(相)相身①「同じ困つた境遇にある人同士が互いに同情・助け合つた」。「武士は」(俗)に相見互いとも書く」。

あいま⑤(相)相見①(自上)「会見する見合」の荘重な表現。「両雄」。

アイエム①(IEM)「手巻の三五ミリ撮影機の商品名。ニエムス映画」。

あいま⑥(相)相も変わる「(以前)と同じ状態でも少し進歩が見られない」。(へ)たな絵」。

あいま⑦(相)相代「(一)一緒に荷物などを持つこと」②費用などを等分に負担すること」。

あいや①(相)相宿「同じ・宿部屋に泊まり合わせること」。

あいや②(愛)用「いい物と思ひ、いつもれを使うこと」。

あいや③(愛)異性「(俗)異性に対する強い性愛の欲望」(道徳の見地からの表現)「愛慾」と書く」。

あいや④(哀)哀慕「兄弟の妻が互いに呼ぶ称」。

あいらしい①(愛)「形、かわいらしい」。

あいらしい②(愛)「形、かわいらしい」。

[]の中の教科書体は教育漢字、へは当用漢字外の漢字、へは当用漢字音訓表に無いよ。

あかじーあかみ

あかじ①赤地 ①織物の地の赤いもの。②赤色の下地の。

あかじ②赤字 ①支出超過欠損。「一財政④」↓赤字③校正で誤りを直した字。「赤インキを用いる」とか「一公債④」国家の収入の不足を補つために発行する公債。②[acacia] ①アラビヤガムをとる常緑高木。[マツ科]

あかしお②赤潮 ①微生物の繁殖によって赤茶色となつた海水。[広義では、淡水をも指す]
あかしそ②赤紫(蘇) ①ソノの一種、葉の色は赤紫。夏から秋にかけて赤紫色の花をける。梅干やしょうがの色づけなどに使う。[マツ科]

あかしんご③赤信号 ①交通上の危険や停止を示す赤色の信号。(危険や不足のしるし)知らせにもたえられる。例「水不足の」。↓青信号
あかしんご④赤新聞 ①興味本位の暴露記事を主とする、下等な新聞。エローペーパー⑤

あかす①明かす ①(他五)①それまで人に知らせなかった事を説明して明かせる。「手品の種を」秘密を「あちあけ」る。②(一)事実においてどうであるかを、はっきり説明して聞かせる。「身の潔白を」証明する。③(一)夜を過して、朝を迎える。「眠る場合と徹夜の場合の双方を含む」
あかす②飽かす(飽五) ①飽かせる。飽かす③(下)「彼の話を人を飽かさない。金に飽かして」「を普通以上に」使つて

あかす③飽かさない ①(一)「飽かさないで」の意の雅語的表現。「あかす」に「飽かす」
あかす④飽かたりにく ①(一)「飽かたりにく」の意の雅語的表現。「なお」「不満足に」思ふ

あかす⑤(一)開かず(一)連体。「一開かず(一)開かず」が無い部屋。「一開かず」でも開かない。②(一)あかか(一)開かぬ」踏切が「明かす」と書く

あかた①(一)黒 ①(一)皇室の直轄領地。②地方官の任国。③(一)な、地方。「一主官③」



あかだし①赤だし ①(大阪風の)魚の身を入れたみそ

あかぢける④赤茶け(色) ①(自下)「日に焼けた」薄よけた茶色になる。「強調形は「赤」茶けた⑤」
あかぢけた⑤ ①「赤茶けた」置
あかぢやん①赤ぢやん ①赤ん坊の愛称。「世間の事を知らない人によつた」とされる

あかぢやん②赤ぢやん ①「赤」ヨイドチンキの意「マキエロ」の俗称
あかぢき①(一)「明時」の意「夜明け」の雅語的表現。「ある事が実現した。その時の意にも用いられる」
あかぢき②(一)明け方に月が出ておらず、あたりが暗いこと。「陰曆十四日(自下)」

あかぢたり④上がたり ①「あがるは、だめに(意)」事業がうまくい、上りようも無いこと。「商売」だ
あかぢやん②赤土 ①赤黄色の粘土。鉄分を含む
アカデミー②アカデミー ①学問・芸術を総合的に指導する権威の有る機関。「訳語は学士院」②権威の有る大学・研究所の称。「一賞④」アメリカで映画・映画人に与えられる賞の中で、最も権威の有るもの。一九二八年創設

アカデミー④Academy ①官学における講壇的な学風や芸術活動における伝統的・高踏的な作風
アカデミク④Academic ①学究的、学問的
アカデミク⑤Academic ①「非実業」の意にも転用する。②「官学的」「純粋で」手堅いが、多少古くも意にも転用する

あかてん①赤点 ①「落第点」の異称。「赤字」で書くこと
あかてん②赤電車 ①(都電)市電など「終電車」方向標識に赤い電燈つくる赤電車③(一)「前は青電車」。「バス」にも同じ「赤」に言う

あかてん③赤電話 ①赤く塗た公衆電話。店先や駅の売店などに常置。市外通話電報の取扱いを委託。「正式」には委託赤電話④と言う

あかとんぼ①赤蜻蛉 ①小形で赤いトンボ。群れをなして飛ぶ。種類が多し。「なほ」は接辞。「一」買う」意の雅語的表現。「さすく一本」(一本)を「買つた」
あかづら①赤紫(蘇) ①「赤」を「買つた」

あかぬける④赤垢抜ける(自下) ①都会風に洗練されて、スマートだいきだ。②垢抜けた④「一した女」

あかね②(一)茜 ①(赤根の意)多年生の草。根から、黒みを帯びた赤い染料を採る。「アカネ草」
あかのまんま④赤の飯 ①「赤飯」の意「植物のイヌ」
あかはじ④赤飯 ①(一)「前でかくひひり恥」「一をかく」

あかはた④赤旗 ①「紅白」組に分けた赤組の旗。号の白旗。②共産党労働組合の旗。③危険停止信号の白旗。「其は、平氏旗」
あかはた⑤赤肌 ①皮のむけた、赤い肌。「一山」(山)「はげ山」(赤膚)とも書く

あかはた⑥赤裸 ①「まはるは、だか」鳥や獣の毛をむした状態
あかはた⑦赤鼻 ①「酒飲みや病気の人の」赤い色の鼻。さげな
あかはら④赤腹 ①腹の赤い小鳥。「(ツグミ科)」
あかはら⑤赤腹 ①「腹の赤くなる」
あかひかり③赤光(の) ①「着物などが」垢や手すれで光って見えること

あかぶさ④赤房 ①土俵の南側のすみに、土俵場の屋根から垂らした赤い房。も「赤柱」の有った位置。↓青房、白房、黒房
あかぶた④赤札 ①「特価品見切り品」につける、値段の札。「売約済みの品物」につける

あかぶた⑤赤葡萄(酒) ①濃い赤色をした葡萄。アドウの皮を取らず「赤」葡萄⑥「赤」葡萄⑦「赤」葡萄⑧「赤」葡萄⑨「赤」葡萄⑩「赤」葡萄⑪「赤」葡萄⑫「赤」葡萄⑬「赤」葡萄⑭「赤」葡萄⑮「赤」葡萄⑯「赤」葡萄⑰「赤」葡萄⑱「赤」葡萄⑲「赤」葡萄⑳「赤」葡萄㉑「赤」葡萄㉒「赤」葡萄㉓「赤」葡萄㉔「赤」葡萄㉕「赤」葡萄㉖「赤」葡萄㉗「赤」葡萄㉘「赤」葡萄㉙「赤」葡萄㉚「赤」葡萄㉛「赤」葡萄㉜「赤」葡萄㉝「赤」葡萄㉞「赤」葡萄㉟「赤」葡萄㊱「赤」葡萄㊲「赤」葡萄㊳「赤」葡萄㊴「赤」葡萄㊵「赤」葡萄㊶「赤」葡萄㊷「赤」葡萄㊸「赤」葡萄㊹「赤」葡萄㊺「赤」葡萄

あかぼろ④赤濁 ①「運動会などの時かき」赤い色の帽子。②「赤」で「手荷物を運ぶ職業の人」ポター
あかぼろ⑤赤本 ①「江戸時代の」昔話を題材にした、赤い表紙の本。②「俗座、低級な小説本」
あかまじ③赤間石 ①山口県厚狭郡産の、あずき色のすり石。「庭石」にも使

あかまつ④赤松 ①山野に生える常緑高木。木の皮は赤色。木材は建築用。あまつ⑤赤松⑥赤松⑦赤松⑧赤松⑨赤松⑩赤松⑪赤松⑫赤松⑬赤松⑭赤松⑮赤松⑯赤松⑰赤松⑱赤松⑲赤松⑳赤松㉑赤松㉒赤松㉓赤松㉔赤松㉕赤松㉖赤松㉗赤松㉘赤松㉙赤松㉚赤松㉛赤松㉜赤松㉝赤松㉞赤松㉟赤松㊱赤松㊲赤松㊳赤松㊴赤松㊵赤松㊶赤松㊷赤松㊸赤松㊹赤松㊺赤松
あかみ④赤赤 ①赤と感ぜられる状態の程度。「一」が

[]の中の教科書体は教育漢字、～は当用漢字外の漢字、一は当用漢字音訓表に無いよみ。

ます「現われる」①「赤身」②「赤み」牛馬肉などを
うちで脂の極め少ない赤い部分③「白身」馬、ウ
カツのように、赤い部分④「材木」中心に有る、赤い
部分、⑤「赤味と書くのは一種の借字」

あかみせ⑥「赤味」⑦「赤味」まじりて造った色の赤い味増
塩けが強い。いな味増、白味増

あかむけ⑧「赤」⑨「赤」皮膚がすりむけて、赤はなが見える

あかめ⑩「赤目」⑪「赤血」赤い目。⑫「あかんべえ」

あかめ⑬「赤目」⑭「赤血」赤い目。⑮「あかんべえ」

あかめ⑯「赤目」⑰「赤血」赤い目。⑱「あかんべえ」

あかめ⑲「赤目」⑳「赤血」赤い目。㉑「あかんべえ」

あかめ㉒「赤目」㉓「赤血」赤い目。㉔「あかんべえ」

あかめ㉕「赤目」㉖「赤血」赤い目。㉗「あかんべえ」

あかめ㉘「赤目」㉙「赤血」赤い目。㉚「あかんべえ」

あかめ㉛「赤目」㉜「赤血」赤い目。㉝「あかんべえ」

あかめ㉞「赤目」㉟「赤血」赤い目。㊱「あかんべえ」

あかめ㊲「赤目」㊳「赤血」赤い目。㊴「あかんべえ」

あかめ㊵「赤目」㊶「赤血」赤い目。㊷「あかんべえ」

あかめ㊸「赤目」㊹「赤血」赤い目。㊺「あかんべえ」

あかめ㊻「赤目」㊼「赤血」赤い目。㊽「あかんべえ」

あかめ㊾「赤目」㊿「赤血」赤い目。㋀「あかんべえ」

あかめ㋁「赤目」㋂「赤血」赤い目。㋃「あかんべえ」

あかめ㋄「赤目」㋅「赤血」赤い目。㋆「あかんべえ」

あかめ㋇「赤目」㋈「赤血」赤い目。㋉「あかんべえ」

あかめ㋊「赤目」㋋「赤血」赤い目。㋌「あかんべえ」

あかめ㋍「赤目」㋎「赤血」赤い目。㋏「あかんべえ」

あかめ㋐「赤目」㋑「赤血」赤い目。㋒「あかんべえ」

あかめ㋓「赤目」㋔「赤血」赤い目。㋕「あかんべえ」

あかめ㋖「赤目」㋗「赤血」赤い目。㋘「あかんべえ」

あかめ㋙「赤目」㋚「赤血」赤い目。㋛「あかんべえ」

「の染は色の」がよい。①「收穫」収入。利益。②「店」

「の多い仕事」③「上がり花」④「下がり」⑤「下り」

「お茶」⑥「反対語は、下がり」⑦「下り」⑧「下り」

「上がり口に設けた欄」⑨「下り」⑩「下り」

「の家に」⑪「下り」⑫「下り」

「一段」⑬「下り」⑭「下り」

「口」⑮「下り」⑯「下り」

「目」⑰「下り」⑱「下り」

「物」⑲「下り」㉑「下り」

「湯」㉒「下り」㉓「下り」

「上がりや」㉔「下り」㉕「下り」

「あか」㉖「下り」㉗「下り」

「あか」㉘「下り」㉙「下り」

「あか」㉚「下り」㉛「下り」

「あか」㉜「下り」㉝「下り」

「あか」㉞「下り」㉟「下り」

「あか」㊱「下り」㊲「下り」

「あか」㊳「下り」㊴「下り」

「あか」㊵「下り」㊶「下り」

「あか」㊷「下り」㊸「下り」

「あか」㊹「下り」㊺「下り」

「あか」㊻「下り」㊼「下り」

「あか」㊽「下り」㊾「下り」

「あか」㊿「下り」㋀「下り」

「あか」㋁「下り」㋂「下り」

「あか」㋃「下り」㋄「下り」

「の」の部は廣くも書く」

「あか」㋅「下り」㋆「下り」

「あか」㋇「下り」㋈「下り」

「あか」㋉「下り」㋊「下り」

「あか」㋋「下り」㋌「下り」

「あか」㋍「下り」㋎「下り」

「あか」㋏「下り」㋐「下り」

「あか」㋑「下り」㋒「下り」

「あか」㋓「下り」㋔「下り」

「あか」㋕「下り」㋖「下り」

「あか」㋗「下り」㋘「下り」

「あか」㋙「下り」㋚「下り」

「あか」㋛「下り」㋜「下り」

「あか」㋝「下り」㋞「下り」

「あか」㋟「下り」㊱「下り」

「あか」㊲「下り」㊳「下り」

「あか」㊴「下り」㊵「下り」

「あか」㊶「下り」㊷「下り」

「あか」㊸「下り」㊹「下り」

「あか」㊺「下り」㊻「下り」

「あか」㊼「下り」㊽「下り」

「あか」㊾「下り」㊿「下り」

「あか」㋀「下り」㋁「下り」

「あか」㋂「下り」㋃「下り」

「あか」㋄「下り」㋅「下り」

「あか」㋆「下り」㋇「下り」

●●●は重要語、①①①はアクセント記号、品詞の指示の無いものは名詞および形容詞の連語。